誰かのために

学校法人宮崎日本大学学園宮崎日本大学中学校３年　　一万田　琴子

妹は先天性白内障で生まれてきた。生まれつき目の水晶体が白くにごっている病気だ。生後五ヵ月のときに病気がわかった。病院を受診した二週間後に手術を受けることになった。退院するとき、医療費がいくらかかるのだろうと、とても不安だったと母が話してくれた。病院の請求書には、手術や治療に約二百万円がかかったと書かれていたそうだ。しかし、実際に両親が払った入院費は、医療費千円と入院中の食事代の約三万円ほど。残りの百七十万円は税金だ。税金がなかったら、妹の手術費は支払えなかったかもしれないと言っていた。

実は両親は、それまで税金を払っても、役に立つことに使われていると感じられなかったそうだ。私たちが学校に行けたり、道路が整備されたり、安心して生活することに使われていると分かってはいても、税金を身近に感じる機会がなかったと教えてくれた。

しかし妹の手術の請求書を見たときに、たくさんの人達に支えてもらっているのだということを実感し、涙が出てきたと言っていた。

妹はその後も何度か手術を受け、そのたびに税金に助けてもらっている。重度心身障害児で、病院にもたくさん行くし、リハビリなども受けている。そのすべてが税金に支えられている。妹は今９歳で、毎日元気に特別支援学校に通っている。「この日常があるのも、みんなの税金のおかげだよ」と両親は教えてくれた。妹が特別支援学校に通って、先生達から手厚いサポートを受けられているのも、もちろん税金のおかげだ。

最初の手術の後、少しでも恩返しがしたいと、母は市のボランティアサークルに入った。市の広報誌やお知らせを音読してテープに録音し、目に障害がある方達へ届けるボランティアだ。私も母と一緒にボランティア活動をしている。録音したテープを持って行くと「いつもありがとう。とても助かるよ」と言ってくれる。私や母の小さな活動も、こうして誰かを支えているのだと感じる瞬間だ。

私も大人になったら、きっとたくさんの税金を納めるようになる。税金が教えてくれた支え合いの心をこれからも忘れず、「誰かのために」と思いながら納めていきたいと思う。